

外部専門員の活用事例をご紹介します！

外部専門員を実際に活用して学習環境や指導内容が改善したケースを紹介いたします。教員と外部専門員とのやり取りの様子をお読みください。

事例 小学部教員の相談ケース

外部専門員 富岡 康一 先生(学習)

○相談内容

言語を表出することが難しい児童のケースです。



<情緒・行動>

気温や気圧の変化によって気分が左右され、情緒が不安定になることがあります。そのようなときに、言葉で「つらい」「嫌だ」と伝えることが難しいため、辛そうな表情で走り回っていたりします。

<表出>

基本的にトイレに行きたい(排せつしたい)ときなどの生理的欲求以外には表出が見られません。トイレに行きたい時には胸やズボンに手を当てて、「あー」と、喃語で伝えています。

生理的欲求以外の伝達内容を増やしたり確実な伝達方法を増やしたりするなど、コミュニケーションの幅を広げていくために富岡先生に助言を求めました。

○行動観察

富岡先生は行動観察を通して次のように見立てました。

「コミュニケーション指導の前提となる本人が要求したいこと」

本児の要求の対象は「お水を飲みたい」「トイレに行きたい」「ぬいぐるみで友達と遊びたい」の3つで、「あー」という声や目線で要求を表出できているので、この表出を足掛かりとしてコミュニケーションを拡げていくことが重要ではないか。

「要求したいことを増やすための指導の方向」

感覚刺激遊び※ などを取り入れた「児童にとってもう少しやりたいこと」があると、コミュニケーションの幅を広げやすくなるのではないか。例えば頭を下げるような動きが好きならば、「バランスボールを使って遊ぶ時間を作ってみる」とよい。それらが、本児にとって「やりたいこと」になれば、「〇〇がほしい、〇〇がやりたい」と指差して要求を伝えられるように指導を重ねていくと良い。

※「感覚刺激遊び」

様々な素材のものを手や足で実際に触れて感覚の違いを楽しむ遊びのことで、ただ富岡先生の助言の意図は、感覚刺激を通して身に付けていくことそのものがねらいなのではありません。感覚刺激遊びには様々な「モノ」が用いられるので、やりたい遊びが増えれば、遊びに必要な「モノ」を指さす行動を促す機会が増えるのではないかと、というねらいがあります。

○助言のまとめ

- ① バランスボールを使って遊ぶ時間を確保する(本人が好きな遊びであるはず)。
- ② 指差して要求言語を引き出すために、手の届かない場所に本児の好きなものを置く。

○教員の取組み

富岡先生のアドバイスを受けて、以下のことに取り組みました。

実際に休憩時間にバランスボールを使ってみると、徐々に本児の手の届きにくい机の下にあるバランスボールを見て「あっあ」と教員に声を掛けたり、目線や手振りで遊びたいという要求を伝えたりするようになりました。明確に指差して伝えられる場合は少ないものの、とても大きな進歩が見られ、今後はバランスボールだけでなく、本人にとって興味あるものを見付け、コミュニケーションの幅を広げていきたいと考えています。

バランスボールを使いたいと伝える



バランスボールを受け取る



バランスボールで遊ぶ



バランスボールで遊ぶ流れ

○まとめ

今回、富岡先生とのやり取りを通して学んだことは、言葉として意思を伝えることが難しい児童の興味関心のあるものを上手に活用すれば、コミュニケーションの幅が広がるということです。

常日頃から丁寧に観察して、「今は何に興味があるのかな？」と、アンテナを高くして児童をよく観察するようにしたいと思います。「自分の意思が伝わった感覚を得られるようにすること」を大切に、たくさん笑顔が増えるようにしていきたいです。

(文責：青山 金吾)

【問い合わせ】

東京都立高島特別支援学校

Tel 03(3938)0415

副校長 渡部 早苗

研究研修部 鈴木 悠介